七柏集

壹

七柏集は大菅丈に於て
たるものにて次下三生は門下その付合。作を収めし
のみなれば此一生をみるにたるものならず

題俳諧七柏首

江東有一叟角巾野服哦於蕪
蘆中聽其所哦則非詩非賦又
非和歌風調可以寓意滑稽可
以解紛者蓋我知之矣是非世
之所謂俳諧者耶要閑以俳諧
鳴一世者前有貞徳後有芭蕉
自蕉葉之敗也不如經笑雲露

雲英

百拙の

也甚間一二題名家者亦寥
不耐秋矣是編也可謂輞川芭
蕉獨存雪中矣上下百年比擬
七體種〻極変句〻逼眞猶夢
筆生擬古詩施無畏者現之十
三才也耶謝諸戲也詩似未和
歌似旦俳諧似丑淨今摠身一
大場上色〻皆演者誰居叟耶
非耶叟者為誰兒童誦蓼太走
卒知雪中菴固不待吾言矣

天明改元夏五　南畝子撰

七柏集序

志を一筋に
只うたふ糸竹
かくとうたふを
なるべし
よく人をみて
月花のうつり
かをしんと
海内の人の

凡例

一 獨吟百韻の表仏ハ、いつく共發句
附言に述て、志ハ、むよりのこゝろざし
負法宗因次員みな、栗の発句初心の
社中二種をしるすのみにあらず純
ならず異端也百韻入処
一 各々の発句を西に東二坐して
文字をまして百席三人を同じ

一 おひいおもに従ふへきも凡句のさま〳〵なるへし

一 句の好悪をも先おのれ〳〵古人の主張よりはまた

つらねやうやうんと志すへし合

一 四季のおほなる乱雑するそし

一 倭漢乃聯句ハ其の

一 古京府乃押韻をなすに

一 安之の盛衰を

先生の徒京極高明子南郭

一　三十六哥仙の一巻を八唯之を称するし乃
ち其歌をつゝりて其人の
名を句のかしらにしるしおけむ
一　貞分の発句に仙連中此餘興又
ふたゝび其十二を揚ぐるを得たり
のこゝろ彩色を思ふ
ゑゝおも

おもしろく候乃今年もよりを
もつ蒲つひて候ふ乃
跡をよろしく宗匠へ
ゆんすのうしろ
何ゝ色のおもしろく候はゝ
乃の舞の雪に窓を写ゝかく
述ふるもよろしく候
かしく

松ゝ亭三駱

指合の十首　明心居士員徳

俳仙の式目をもとゝし古今の風
和漢のふみをかりて季述情旅同字
まじへざるのみなり
けんこのはをかれ又色をしこゝろ
七句をもとゝし又句ハ三句又句ハ

少をやみまじへざるの体用を
名所国郡を述情旧表をもとゝし
鬼女虎狼の千句の私
面をかぶり一吐一句を
新式の一吐一句は二句
二句より三句をへし

三句而轉四句而轉四句而
面轉五句而轉六句而轉
彩或轉書或轉物
或轉七句書一
書亦有轉
或轉或不轉
附書
邵擬古七首
之跡之作也
是業之高者
唯杜甫乃
每一篇
既七一變而為離騷再變而為
西漢五言三變而為歌行雜體

四變而為沈宋律詩ともなり
ゆくゆくは實をそぎ
世一代かさり
仰仰の
ゆくゆく
うつ小唐ち寺
なかくの
むそくも

源頼義朝臣

後二位家隆

ちゃうふくの
る心智ふかる人

藤大納言為家

ふうよ海老名ち

正月法師

ゆ

待賢門院堀川

下よりうへ

於一句二句を善ひ
おももなく宗祇宗長玄川の

孫の名乃三つ也

又

み仏をたのむこころを

ゆるすなくくるしみの時

多日の事乃おもひすて

貴后経津乃宗門善を破

邪念を記一句の聖号乃人を往生

せしめ仏乃ごとく劇悦を与一世示檀衆

念を称乃天下ニ仏乃名

つゝの宗門善悪のなきもの

おゝ仏ありがたや多年の

罪悪懺悔乃ふかきを

仰信戒め給ふ

又

下ゟ読ミ

悔乃こゝろをのべる

又

冬ごもり　てる日も雪堂の記
白き紙仁紅葉村を送る詩
漁の火義朝を射（ユミヰル）
再会　てる庵
白氏うた仙
伶倫を
日ぐもり糸竹

又

笹ぶね　松（サメ）乃　血をのむ
根入如意ヶ嶽　六十の蒭（ウロヒ）して
宗所ま胡座（アシラ）のく世を東く
おその的入花のそなゑうるふ　住吉祝乃
宗のねこなるふふ宗を着て

又

遠乃代の小ふを乗ふ
乃能ま乃仏を

画舟よ向あるものを漕ぐ来
ほゝゑみ
旅人と我名よばれん初時雨
又山茶花を挿くてて
駒(カゝキ)鈴鳴の音も旅ごゝろ
又
蹄とゞめ一見の茶杉
海のごとふさ稲の重り穂

夏德の比

參大

賀を記して連理の梅人貴妃桜
ふるき比の菓子ふかし茶
思ひ物語ふみ何のまと三ツ手
おもひ出ぬ宮ほ仏
ふりし月花ふふむ葉ほ隠れ
きそふりまふの俳くもり人

西東小みん[illegible]ことも神一[illegible]有こ
[illegible]須石そうそうを船の志をりて
[illegible]扇を天生[illegible]うみそう限まくこと
[illegible]庵ん世界をもこ八徳兵衛
二[illegible]のうおそれを一郎下の[illegible]
人ま[illegible]立の山路そこ[illegible]は
[illegible]麻なふ月入細こそうまこう
[illegible]給氣ふ義理も埋も秋を此こ

[illegible]記[illegible]給義[illegible]
[illegible]有ま[illegible]
[illegible]指そ[illegible]
[illegible]に刑そ[illegible]
[illegible]酒そ[illegible]
[illegible]流を[illegible]

蓼太

大解宮の池を見めぐりて
石鹸（シャボン）工場の前を過ぎ舟やに乗りぬ
月光の新緑に浮かぶ景色なかなかみんなと
砂をまき白かもめ山茱萸の花を見る
十
甚雲寺中山茱萸の花さかりなり
去年ここに来し時の事など
乳母の思い出の里抜けるのおくてに
多化入小屋を借りひるを食す

御堂の前三重の塔を望みて
もとの道を帰る
五十男四十女のさそひあと
ふもとまで行やうんまき
山寺に手まきされき 歌入草分限
無しの子かえらぬ
陰ぶた小月の輪ほの判官
当り兵衛子なまなま

十ウ（西瓜）

[illegible]
軍 [illegible]
お松の [illegible]
[illegible]
[illegible]
[

ウ
拂々乞屬義女三ヶ年ヲ経
ゝみの矣久根牛房牆衣
葫蕾入緋威蕾葡の印字威
元根いそふ屬久義く
乞後妻屬ものく十冊月
牛頭馬頭拜眾覚悔
何ヶ年ゝ無自添
風の疹冷ものその根本の疹

山田ヶ雲ヶ鬼物ゝ
年一
山田機ゝ妻ヶ文ゝ陽久紗
緑青ゝ
十
異國一屬風
武勉の君ゝ
姐板年ヶ
所ヶ素ヶ

七箱二
七

万葉の手ぶり
達ヶ嶺(井)の
峯の雪片々と
鳥と呼ぶを又
不忘の田面月
賛辞を草す詩
ん歌ぶ

虚栗の比

千々年刷る松の君の歌大立

月なくてこの夜の雪や簾外の三寸

立ち花の頃の朝の描入れ掛茶事

ゆふべあれ明日の使の供は探らん

聲よきを明日の使の供は探らん

雪ともとそそぐ竹よ初霜

蓼太

銀の釜中乃洞琴 秋葉

ものする庭の松を見ん

なき拠乃細眉男のもとへや

高舘 秋門の春

夢七日血脈の経と綴ります

椎扇と化して相の実を包

殿に打て月のえとの秋もまる

七仏忌まる神 秋色

歌老如吳天の雪を統ふる
無を窓人と異び指そや
花ありて酒ありて山を穿てや
十湿(スヒト)絨(ヒト)の屋の様の家や幅そん
家そう多も原来一根そ
人そ多ひ神仏甲斐そ多そ

箱時そ言ふりそ無そ扱そ百鬼前そ
おそ通扱そ百鬼前そ
僧迷一里そ
世そ多そ 庵そ
入月や高そ秋ホ俤弘そ

十ウ

人[illegible]
小屋[illegible]
[illegible]千[illegible]
屋[illegible]
[illegible]
[illegible]

續虛雲禾の比

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

參太

ノ

抱釈を投剣、うものうたてまつ
下前世
釈迦大名よはく
釈迦
なりく
もりて注兼
家
女
八小頭
思

十

春
八幡
釈
乱
悪
時

十ウ

出湯の香と
夏旱つゞきよく
猶干ざる水田
遠めをりつゝ
一雨よりつく花の
暑き朝なりのや

未来記の巻

琴太

不雲死 楊岐和尚の弟子 三祖の山居の前
峯 と名ふ 山居の前
陲（スエモノ） 乃土 養（ヤシナ）ひ
押（オサ）へかひ 禁（イマシ）めを禁（イマシ）めまもる
多義義す 朝夕 無きて
雪ふ 也あふ 使（アヒ）與（クミ）まもる

例禁の如く
上く 右と 同じ
ひ入噺て
気色 死 向
正宗 死り
三のひ
片岳の抱を
書ふく

十

歲儀の

なりそうなものを拵えてきたなら吐あり
かりやすい深の竿子干物のこと
雪なり八ツ頃迄に着する汽車にて来
着そうそう一寸安心さんそうそう
いけないの仏を拵えてこれ
夕餉仕舞ふ門の表戸板
月松の世なりと云ふ仏
四ツ頃迄なり如

なふもの書ふ深の橋おこと
干菓ふ入物の表る 仏前
吸ふ九の月ふ桃とあひく
久能入ふ御山のこと
十
指ふ手三月朝入九さうを
まいまいれ入深より出こと居ふ
二ツふ春月代すやきて
紺の油等手法明時めく

ナラ
侭是を舩艦の雷轟押ゐ
而後の只是も舩艦の雷轟押ゐ
而りそと雖も社又さ記おひ
養（シナフ）ふ所まで
獲（シメフス）て俾元乃拇ふ花ふ
まで 扈の

[illegible]
[illegible]
[illegible]

一驚を喫するの
管狩谷棭斎翁
宮崎筠圃侯
高橋伯士

贈答 琴太先生

芭蕉翁奉悼七物語
同一行物
雪深意
同悪筆硯紙
於八品手水鉢銘
同杜国墓頂上石記
同雑俳遺帙
同発想再来八章
菊水入魚金亀魚画

参太

菊太
吐月
文母
魚文
牛飲

虚舟
一兆
三駄
吏中
子與
沙羅
菊
太

はるそ大乙鉢よ
めるそ穂りろ
文太のむ香あり
春ろ川 富ろ 二百ろの四は不鷲
猿人の立あるき 物をろ 仝
脉をは乃至 太
雛わろり太郎より 仝
等あるそうふ者之系味噌 鷲

ウ宗盛ろ第ろ庭ろ小右兵 仝
お撃ろ川ろ親乃ろまる 太
小乃ろ屋松植の木根を屋ろ 鷲
放生川乃橋を押ろ 太
秋風ろ汗入ろ袖の月 鷲
居合抜ろ名乃ろ者乃称妻 太
袖ひろる笠所の表を 鷲
称入穴をまり子年乃ロ 太

古賀氏なるも海を渡りて
其屋久金のさまざまあり
而うもの花久
京住姉さまひ
不ふもの力所
孫弘姉さき里乃屋川
持（チカ）言（コト）不孫疾并のま海さ
ひうくいく 住まりく 童

太 鷲
太 鷲
太 鷲
今 鷲
太 鷲
太 鷲

於そうの花浦まる扇の風そう
果そうふそうて
ふより袋まる
里の屋さ花
常神久こく花
そのも尺
祖うの屋ふ月を
姫ともさをうく

太 鷲
太 鷲
太 鷲
太 鷲
太 鷲
太 鷲

ナウ
いそよ〻と新芽を二人ぐみ　太
移植ゑまりよき盛業の石　鷲
小御門も善きを佐よ通さ〻く　仝
まさかのさゝきはなの新　太
若ゑまさ〻ぬ人ぐみ七日　仝
辻宝曳もこゝろの多ゆふ　執筆

環流亭興行

石川や利生を尊き方の月　参太
　　光琳
細道ありく里の柱子　苔蘿
　コンス
粢ゑの葛を泥の親子ゑ切て　連丈
折うき雨ま前句の体まく一兆
山ぢ登整楚楫手斧乃音　蘿
旅一言泌ろまも初会　太

ウ

人申さく齋会すまての雲衣　北
世を經ん種まくよ高きめる　丈
孫迄の堺もとめ給ふ　太
伽羅と經ん名ぞ尊き　羅
おもふこと　枕も知ぬ　丈
苔の衣も　北
萩ちる君の　羅
比野も守ん　太

十

雨ふるまゝの庭の萩原　北
門長寛元年　玉のこさ　丈
片敷ふすま　太
酔ぬく　羅
つゆ　北
多延の山こえ　太
元政の歌ふ　丈
とぞ　羅

通一矣の空と共に
驚て宮く
象よ憂筑蘇の
郷治ら思ひの
さらさら板よ
よ治四ひをの
治文て月下の
屋半活ぬ之一

太　兆　屋　丈　北　太　丈　北

帆ふ十里晴ら
線をそそみそ
間ふむ一む
いつの亭ら
廣指ひぬ
氏文のら

秋風　屋
曽牌ふ　丈
崔扮ま　太
ふ始ぬ　屋
ふ佐山　北
胡蝶て　丈

芭蕉庵真行

蓮の葉や　　鼈太

林一ら也終烏乃芸勤の郷ゟり　太
川ふ下ゟ花乃三弦　都
冴処ゟ備ゟ月ゟ夕嵐　江
委　功者ゟ俤母の遥留　太
十
ほゝ書ゟ座ゟ処ゟ移ゟて歩ゟ挽　舎
杉蒼ゟも五月乃町　都
日暮てゟ千人切ゟゝふ　太
常陰ゟゟゟくゟ今ゟ恋　舎

一理屈杜女子細なり　都
かゝ仲ゟゟ雪乃実　江
陶ゟかゟゟくゟ忍ひ池　舎
稽ゟけゟふ冗俤の掃除日　太
留ゟ人ゟ半乃大遍　江
いゟくゟ論ゟゟの笑　都
容ゟふゟまゟ雪ゟ月　太
ゟ一酔ゟく七夕乃翰　舎

蕉翁全傳の事を教柳
玉振子より聞て一生
松脂をとるをこのむ
翁百枝を翌年秋三
さきそめ給ふ
大正癸の
常盤之り

都
江
舎
太
江
都

寄巣菴奥行

簑太

寶川や小舟も七ともう梁
秋もつく春をもつゝめ春の枝　鳳宿
雨催ひ菴も秋也月就て　虚毎
笄掛ふ所の山おもしろし　蘭室
志ほりてとる夜食ともき　宿
此ほとり松仮　太

室　かとうの人形屋にて雛いろいろおもしろく作りたるを見て
舟　雛いろいろ作りたる屋の戯れ
太　使者まねく福の神の面白き
宿　祝詞奏する幣洗米
舟　松明よりつく煙
室　まり川安松連の会俳
宿　懐も秋もふところ
室　菓子屋の角を曲りくる
舟　月

室　いかめしき冠者と雨
舟　れてふみくばる俳書の里
宿　雪ふかき山路をゆく
室　ひとり也家ゆく行燈
宿　老の目を訪書のかすめる
太　いまよ冬ごもり　河内侍
宿　枝よりも長き三年の髪
舟　乙女子の新ぢく
室

常ならぬ夢まくらの
仇酒はてまくら
菊もまだ二日 碎太
何もまだ鑒室
お今すぬ柏舟
白木(オニ)(ケニ)梵妻
西一入筋も海
風の萩京屋
岡ひく

宿
太
舟
室
宿
舟
太

沼会女柏(ホ)芋蓮と熊のは
新茅小舟へ何と仮私
麻畑(ケニ)香を畢振り純
りそ一角る椿ホ投童
笠紙ま花ま高今ま古朋堂
風まうの事や寝賛私

宿
室
舟
太
室
舟

雪深館與行

寛元癸丑大人道の紙元
茶事友福松隣
玄雲小春の機嚊や薄つく
梁うも越さ女波入さく
打うと出賀子月の芒傳
ふもと拾ふてもよ

蓼太
松隣
富屋
茂林
野荘
故流

ウ
分の秋入行風福ま玄更姉
陰姉も鋼ま
村鳥小独蛍ふ
横よ一般子
那〳〵伯の
絵いさとあ
打ふとも鳥ま
行風うけ玄

隣
太
林
屋
荘
流
太

雪孔志陣

方丈いろ〳〵あるなかに
阪中をこえて河ある月
詠花の松をこえ
井波へ行く廉谷なる
里に出て平野
時雨ふる連雪ふる
指賀て糸屋
赤毛氈のさゝめ雪
冬拈

荘屋　林流　荘屋　太林　流

玉章をこえて
我さと笛孔秘曲感る
富山まで暗夜
高簾前を鞠き
吹よこる時
行くるかもる
市里事月
いろ〳〵擬集の秋

隣屋　荘林　流隣　太屋

ナウ
田ゐ[illegible]味[illegible]
屋風[illegible]
逕笛の[illegible]
芝染好く[illegible]
小菅[illegible]
楊く[illegible]

[illegible]と三[illegible]
[illegible]狂歌俳諧[illegible]
[illegible]一つ[illegible]
[illegible]
[illegible]野[illegible]花の文者
[illegible]

林
流
屋
太
隣
荘

蓬葉菴真行

[illegible]
山[illegible]
先[illegible]
風[illegible]
松[illegible]
[illegible]

[illegible]の日和哉
[illegible]旅人
[illegible]
[illegible]
[illegible]

蓼太
亀二
鱗江
李桃
文雅
太

係ある事柄にて相撲の五番勝負
千部の法華経を読誦する
香花を供養して神を祭る
蝶や鳥や虫を
端午の菖蒲を
年の内の汚れを晴
浴衣を着て
手を打つ

桃　江　二　雅　端　午　菖　蒲
桃　江　二　太　蝶　鳥　虫
桃　江　二　太　年　内　汚　晴

代官を庶民
喜ぶ
三法を修
其手段と
十
来る
招く
冬の
仮名

雅　太
桃　桃
江　江
雅　雅　二
太　太
桃　桃

船をかつぎ
常世の月
死灰
をかぶく
曲り
女を抱
晨(アサ)
歌の合作
ん

咄つまらぬ俳諧の会宮の宿　江
人相書もよし男なり　雅
独立ちそうで孤の菓子拾ふ　二
芥の如き杉の葉の神の物　太
雨うたを揚句にすむ夕すゞ　桃
月の中まことに拾ふ茶元　江
春ふかき拾ひ主さだまらず　二
雅

みまもりつゝと鮒乃会　太
人おもふぬ城下社鶏　桃
雪氷の乙の乳　雅
拍子取る親仁なりけり　二
弱菌こゝろの記和中　江
先ゝ祝ふ百軒　執筆

修多羅閣 奥行

名もなき秋より深き梅ぢ哉	蓼太
日もすがら秋よりのものそも	曙
其ま〻風情を踏つまて	仝
仕舞ふ月見百姓	太
七夕ふ唇なめるものゝ	仝
最後をとふ雪の夕景	蘭

日もすがらの梅康桂川	仝
なもなき寒ン寿あるべん	太
さそうふ雪ぢ雪ぢ	蘭
蔵ま如ぢそ	太
京ぢ年話記の絵を合もし	蘭
日和ぢ忘帆ぢ	太
此里ぢ大秋ぢ月の時つゝ	蘭
死ぢ如ぢそうり白頭孔秋	太

もみぢ葉の常世にうつろはせ　蘭
をとめ子をそのみ仏前のつとゝの　太
曲をしぬふる花の蔭なると　蘭
そゝぐ玉の庵のいつまでも雨き　仝
十
糸柏子機ふむ日も斜之　蘭
歌まり抛つ春の夜ふけらむ　太
痛よと乳房もとゝ百ねき　太
津波をも免れ元の位哉　蘭

二日酔の面ふく扇　太
横よ茶漬乃椀の重さ　蘭
俥夫の汗なくむしぬぐひ　太
云ふまいそんへ入院治せ　蘭
繋ぐ綱久山駅馬場耳利　太
結仕事を業とせぬ　蘭
中垣乃穫そのゝ一帯月の宿　太
好好うら秋入風とうそふ　仝

十ウ

芥菜と号くる幼舎心　蘭
くるる鴻崖の仕合　太
指出す細工の簾　捷　子
七ツ下りの猩々　利　之
細引く井も氷蛙も　花の実　太
芸ある巣も乙鳥の巣も　蘭

宝二亭與行

書之のく清至ニ重之ル　蓼太
窓をもるゝ山の端の月　大磬
鶯鳴る門の若木哉　可候
茶と共と包ふ雪の朝　知足
雛ゟ生ゝ抜刀　素好
ゝゝ乃二番三番　支水

年も漸之日まるに花催ひ　宜麦
勤ぬ酒をそろたるく　太
狐の之く里みよ之の丁町被　麿
うき四花よりと初懐路雪　好
樽咲ら乱ふまでさ乃ふ　足
河めめ菅ま毛の茅門　麦
憂おくる行（ニサヤウ）徑ほかく仮枕　侭
及痛ら古い逸句なれも　水

豊年の不山秋蘇竜るうまく　太
月細くとまるまる雲水　好
哀まるまる機なる花衣　足
ふうも早ら螺ふ也雷　侭
十
海ると長雪原のおれせ　水
沖孔ふ乃まるもも花　麿
能まるさ法まる舟之り也　麦
かいるまりく裸よ仮帳　足

ゑ千鉢饅掬入大の冬牡丹　好
二代作いろくさの花乃姿　太
口吟ふ入江ふ弱竹く　作
籟うみそ馬来告　水
うぐひさ床を紀ま　足
玉うそそうり紅葉の射　麿
初秋まり女郎め月乃秀　麦
樽そそうり屋のようふ　好

（ナラ）
童ふなそめうま丹きくひ
入る松のまゆ又人まく
招ま入ま海ま乃秀の巻一ツ
部の的乃鼓打　作
花う風冬まり　水
朝の利ま　麦
細魚作会　太
執筆　麿

夜桂菴與行

相當やと京まで乞參る事
寺もの町 忠兵衛 一得
蒙求事論語の後也代りて 桃長
稽古さそくも學のそこら 盤中
月ごとに當月の番門帳やり 得
ゐる事ゆゑ相対戸 長

參太

物語ごとの部ばけの部なり 中
二部の内ごとに五ツ宛あつまる 太
ごとくに押合ひ大水の時躍 長
仏間を借てこゐる嬰児 得
次点の部も終りすかり 太
也す居る處の半の巻ゟ秋風 中
月次事村雨巻ごとくさらさら 長
急ぎ仕上のお礼おさめ 得

辨さめ乃至硯池溢るゝ一ッ　中
ゑて社上より桃の日　太
燭基と千本の花盛うち　得
之人と共写る　中
十次伝の母と也ぞもさ　太
墨色已に淡く紙も黄ばみ　長
相旅の仮寝も　得
和月ごもの楓梅樓　中

口あまた三篇の句ある扇ぱさり　太
数隊作まつりくる三河り節　長
三夕ふと興ずと雪なのめ　中
為もなくそも門の景庭　得
時雨降まさ沈殿のなき　太
多賀救ふ船をよ　長
我称ふ実なき月日　中
曲突ふ也ふなき　太

ウ

昔主稿を樹る秋の風　長
沛日芝へく鄲　何ぞ　得
時あき夫君の大飯の唐うん　太
一夜うき夢すの枕の豆　長
花る廣ふとくと笑ふ　中
袖衣文忘の牙ある比　得

奥羊亭真行

ゆふ雪を朝ふうもてる小鯨心　驂太
暖簾蕭条町の涼風　竜舎
此ほとゝぎすも鳴ぬ夏　方壷
弓弦を外すもうらく　彭壽
照月の雲のとそうり下河原　呉橋
ゑ乃細き穂蓼赤蜻　太

寛保三年癸亥春
吸ふや三十七女泊梅　舎
硯こそ旅の命の筆すさび　壷
おもひおもひ　橋
捨ぬ身の行衛や細の一すじ　太
生ながらえて月を経ふる　寿
風雪に深く穏ふり　壷
志成る歟の詫ぎこの楊　舎

為綱をして行幸車を通る波の波　橋
嚊もさらさらとまるなり　太
ぶつ〳〵と泡となる花のあやせ舞　舎
歩まゝまた沢庵喜乃雲の雨　壷
何を言るし揚鼓三つ四つ　寿
松柏ふのきを抜よの星何ぞり　橋
生ながら旅立の小舅ぶ乞食　太
　　寿

兒等を引ひろげる　壷
何ンふとも云ひ出さぬ意　舎
橋ものゝ憂ひの有ることを忘仏　橋
桃林動くともせの中　壷
碁仕ごまのくともせず　舎
大組板の鯉の腹かくし　壽
御存知の幕吹月の朧夜　太
雪ふり出すものゝ我國の山　橋

（ナシ）
やうくと仮名の板乃葉掘ひろう　壷
云ひくも雪の有ぬ　舎
我嬬よう恒の茶筌売あの茶　橋
恒の笹くも石とまちまち　太
振袖七紀の花笠四人関ヶ原　壽
赤き羽文人ひりと自　執筆

芙蓉園奥行　和漢聯句

春ー暖ニヌ月開レ樓ヲ　太
鴨の香みそなの毛鶯乃初ねこゑ　蓉
相逢テ說ク舊昌ー游ヲ　太
鶯うけふ石とされいひ乃ふる　蓉
披テレ襟ヲ傍ラニ松ー樹ニ　太
一そくとまきしこゝろ　蓉
驪ー歌杯ー酒愁ヲ　太
君ゆへ幾度ふく帆をよして　蓉
渚なる乃真ゆふ　太
霜ー華散ス二簷ー頭ニ　蓉
名しくのかくとも　太
袖攜フ二錦ー谷ノ香　蓉

示船の檣ともれく何ぞ急ぎ
雲ー水共ニ悠々　蓉
よも月海ニまと二百十日まで雨　太
十
君不レ見ヤ青楓入ニ悲ー秋ニ　蓉
短ー褐渾テ員ノ當ー壚ノ邊リ　蓉
松魚ふ重ねてもとふ玉川のも　太
涉なりくりくと痛く語なり　太

願ハ以ニ歌舞ヲ答ニ聖代ニ　蓉
咀乃小春と松のさる乙甲　太
積ー雪ハ當ニ是レ含ニ春ー烟ヲ　蓉
三つのもとゝ松ゝ晴き組討　太
悽ー慨撫レ劍ヲ明ー月ノ下　蓉
秋まなの雄峙の友　太
張ー柿梁ー梨園ー中ニ連ニ十ル　蓉
鞠すくと鹿釜る　太

来テ酣ニ馬ー上抱ヶ琵琶ヶ蓉太
十ー山遥ニ控ヶ指ー掌前蓉太
珠ー樹花ー開蓉ー葉上蓉太

芭蕉菴與行

秋茅太

ウ

松嶋より秋田迄
出湯を尋ね
武左衛門
伊勢参宮
女ながら
松島の風景
思ひ
おもひ

太
囫
文
太
囫
文
太
囫

ふるさとの
風雅
名月の
なき
此一年

文
太
囫
全
文
太
囫
文

此湯
伯耆
舟出
二貫二
舟出

囫
文
太
囫
文

汗拭ふそうのまゝふと小六月　太
敦賀屋十日泊湾入柳哉　圀
五郎かゝまつ迄の富士見ゆる　文
よろこんなのくも高尾住ける　太
卿報そこ〳〵虚空蔵ま、の仲くく　圀
そなるむのよう鼠の穴へ　文
暖入椒すそ〳〵秋売月　太
菅雪くまも傾く傾城　圀

新雪春の如くまひ降て雪くふ　文
やゝあさ海のしづ〳〵申酉の一乱　太
雪ふる〳〵乗物の外も白くなる　圀
泥あるくふまれ〳〵てかゝる色の日乃光　文
悴まてもやあるき色の日乃光　太
仰むく〳〵月を帰去来　圀

雪青廬自筆行

[illegible]
[illegible]
[illegible]

冊子ニ書ヲ書キ更ニ此世界
ヲ去ラヌ花ノ何ヲ示シ
居ル君ノ機嫌ヨク鄭重ニ
角カヲ招ヲ
十
腰ヲカケテ酒ヲ傾ケ
繁昌ハ
或ル秋ノ八十隅ノ
又ヨリ来ル冬ヲ知ラヌ

豆太
守太
豆守
豆守
守太
豆守
豆守
守太

空往ク車ノ大橋ヲ
冊子ニ書ク
篇唄ヒ
宇治ノ福寿
ヨリ富ム
ヨリ廣キ
月ヲ
高ヲ
等ヲ

太守
豆太
守守
太太
豆豆
太太
豆豆
守守

太
豆
守
太
豆
守

代〻染家の
高位を敷〻
くなるに
以来云
はるるをさくまで
のち身うつる後の
光陰を

おくるにハの
多くこと九時を過〻
るに堪ざること
うるしの後に
〻
元〻
雪助

もの隙の工を借る須なるを
もて糸を結ぶに容易ならざる
ゆゑ糸を集めて全部のあるを
用ゐ不用の糸を抜きもてを
組む只其務むる糸屑なりよ而已

玄峰
魚文